

Title	「インワ時代」 その二
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 22 p.15-p.33
Issue Date	1970-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80367
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「インワ時代」その二

服 部 正 一

“Ava Period, II”

by Masaichi Hattori

နိဒါန်း

နမောတဿကဝတောအရဟတောသမ္ဘာသမ္ဘုဒ္ဓဿ
(ဂဏုဟိ) ၂၁-တွဲ၌ ရေးသားခဲ့ပြီးဖြစ်သော“အင်းဝခေတ်” (ပဌမစာစောင်) ၏အဆက်ကိုဆက်လက်၍ “အင်းဝခေတ်” (ဒုတိယစာစောင်) ၌ အကျယ်ဖော်ပြပါဦးမည်။
မြန်မာလူမျိုးများ၏စံပြမင်းတပါးဖြစ်သောမင်းခေါင်မင်းကြီးနှင့် မွန်တလိုင်းလူမျိုးများ၏စံပြမင်းတပါးဖြစ်သောရဘာဇီရဘဇ်မင်းကြီးတို့၏ရှေးမဆွတအကြောင်းအလျောက်ဖြစ်ပျက်ခဲ့ရသောလူမျိုးချင်းဆိုင်ဖြိုင်မှုများသည်ကားမြန်မာ့ယဉ်ကျေးမှုအတွက်အကျိုးသက်ရောက်ခြင်းလုံးဝမရှိစေသည်သာမကပျက်ဆီးရုံသာပျက်ဆီးစေခဲ့သည့်အပြင်ရခိုင်ပြည်ကိုပင်မြန်မာမွန်တလိုင်းနှစ်တိုင်းပြည့်စစ်မက်ပွဲသို့ဆွဲဝင်စေခဲ့သည်။ ဂွမ်းပြည်စော်ဘွားများကိုလည်းပို၍ရောင်စက်စေခဲ့သည်။
ထိုအခါတွင်ပုဂံခေတ်မှစ၍အချို့သောရဟန်းကျောင်းများ၌ဂွာဖွေပြုစုခဲ့သောပါဠိစာပေလုပ်ငန်းများသည်လည်းဆုတ်ယုတ်ခဲ့လေသည်။
တောင်ငူမင်းဆက်လက်ထက်သို့ကျရောက်ခါမှမြန်မာစာပေသည်ကြီးကျယ်စပြုခဲ့သည်ကိုဣန္ဒိဝတီသိသာရပေမည်။
ဤစာစောင်၌အကြောင်းပြု၍ပါဝင်သောပုဂ္ဂိုလ်များကားကြီးကြီးကျယ်ကျယ်အမှုဆောင်ခဲ့သောမင်းခေါင်မင်းကြီးနှင့်ရဘာဇီရဘဇ်မင်းကြီးအပြင်မင်းခေါင်မင်း၏တိုင်ပင်အမတ်ဝန်စင်းဖိုးရဘာဇ်မင်းခေါင်မင်းကြီး၏သားတော်မင်းရဲကျော်စွာ၊ ပဲခူးမြို့ကိုတည်ထောင်ခဲ့သောဝါရီရူ၊ ရခိုင်ဘုရင်နရမိတ်လှ၊ ရဘာဇီရဘဇ်မင်းအားတရား

ဓမ္မတော ပြော၍ မွန်ဘုရင်ကို နေပြည်တော်သို့ ပြန်စေခဲ့တော်မူသော ဂ
ဟန်း စက္ကိယုမြတ်၊ မင်း ခေါင်မင်း ကြီး အနိစ္စ ရောက်ပြီး နောက်နန်း တက်
သောသူ၏သား တော်ဆင်ဖြူရှင်သီတယု၊ ဂဘဘဒိဂဘဒိမင်း ၏သို့ တော်
ရှင်စောပု၊ ဂုရ်အဆင်း အလွန်လှပတင့်တယ်၍ အကြံဉာဏ်လည်း များ လှသော်
လည်း မာနကြီး လှသော ရှင်ဘိုမယ်၊ ရှင်စောပု၏သား မက်ဖြူခဲသော ဂ
ဟန်း လူထွက်ဓမ္မစေတီမင်း ၊ ၃-ဆက် မြောက်တရဖူး ၏သား တော်ဖြူ
သုတလေး ကျေး တောင်ညို၊ ထိုထိုသော ပုဂ္ဂိုလ်များ ဖြစ်ပါကြောင်း ။

ま え が き

「インワ時代」(その一)に続き、ビルマ族を代表する第一ミンガウン王とモン・タライン族
を代表するヤーザーダリ王との宿命的な対決はビルマ文化史上に何をもたらしたか。それは唯死
と破壊とをもたらしたに過ぎず、その上、アラカン国を彼らの争いの中に巻きぞえにし、シヤン
諸州の土候たちを一そう増長させた以外に何をかち得たであろうか。また、パガン時代よりはぐ
くまれてきたパーリ文学の研究もこの時代には影をひそめ、タウングー王朝時代に至ってようや
く純ビルマ文学の萌芽を発見するに至るのである。

この項にて活躍する人物としては主役を演ずるミンガウン王とヤーザーダリ王のほかミン
ガウン王の相談役ウオンジン・ポーヤーザー、王の長子ミンイエチョーゾワ、ヤーザーダリ王が
その流れをくむペグー王朝の創始者ワーリールー、アラカン国王ナラメイブラ、ヤーザーダリ王
に説法して仲裁役に立った僧侶サチヨトウミヤツ、ミンガウン王に次いでインワの王位を継承し
たシンビューシン・テイハトウ、ヤーザーダリ王の娘シンソーブ、美貌と智慧においてシンソー
ブと競い合うシンボメ妃、シンソーブの後継者となった僧侶出身のダンマゼーディ王、インワ第
一期王朝最後の王カレーチエタウンニョー等である。

ミンガウン大王 (Min: Gaunggyi:, 1401~1422)

タヤービヤー王に次いで、その弟ミンソエは1401年ミンガウンの名で王位に即位したが、後世の
人々は彼を Buyin Min: Gaung, Pahtama Min: Gaung (第一ミンガウン), Min: Gaung-gyi:
(ミンガウン大王) と種々の名で呼んでいる。

王が幼少の頃、艱難辛苦をなめたことについては学報21号、7—8頁に述べたが、その苦しか
った頃によく彼に付き添い面倒を見てくれたンガキンニョーとンガキンバの二人を高官に取立て
た。また、父王ミンダーゾワ王に仕えた賢臣ウオンジン・ポーヤーザー (21号、6頁) はミンガ
ウン王のためにも引継ぎ忠勤を励んだ。

また、弟のシンティダッに“ティリゼヤトウル”の称号を与えてサガインの領主とした。

ミンイエチョーゾワ (Min: yè kyaw zwā) の生い立ち

ミンイエチョーゾワの生い立ちについてはビルマの史家たちはこぞって、彼がモン・タライン族の王ヤーザーダリの息子ボーローチャンドー (Baw-law-kyan:daw) の*化身であると述べている。ボーローチャンドーは父ヤーザーダリによって*嫌疑をかけられた結果、死に至ったことは、学報21号、14頁に述べたが、なおウ・ボチャの記述によれば、

ボーローチャンドーは死に臨んだ時、「私は父上に危害を加えようとは断じて思っていない。もし私にそのような意志が些かでもあれば、わが身は未来永劫地獄へ落ちんことを。しかし、もし私に父に背く意志がないならば、私はこの世を去って後はビルマ族の王子として生れ、タライン国を足下に踏みにおらせよ」と祈って毒を仰いで死んで行った。この祈りを聞いて、ヤーザーダリは、「わが功德によって、幾世代もの世においても敵の計画が成功せざらんことを」とシュエモードー・パゴダにて祈った。

*最近出版されたビルマ人史家による「ビルマ史」でも、ボーローチャンドーが実在の人物であることは認められている。ミンガウン王がその化身 (winzā: gyin:) であるという考えは現在であれば全くこちつけた話であるが、当時のビルマ人の間では十分通用することであった。

*ハーヴィ (p.71) によれば、ボーローチャンドーが馬術を練り、彼の象の牙を研ぐのを聞いてヤーザーダリ王は彼が父に対して謀叛の企てがあるのではないかと嫌疑をかけ、二人の側近を遣わして彼を処刑させようとした。

その後、時を経ずして、ミンガウンの女王シンミナウは懐妊した。Hm. Yaz. によると、懐妊すると、彼女はタライン国のダラにあるマンゴーの実、モッタマにある青い香土、*ボンサラインの水、等を食したいという願望が起ってきた。早速、ヤーザーダリ王の元に使者を送って、それらを求めたところ、ヤーザーダリ王はそれが彼の息子ボーローチャンドーの生れ変わりになるであろうと信じて、大臣高官たちと相談した結果、マンゴーの実を葉に浸し、また香土とボンサライン水を不純なものにして送った。シンミナウ女王はそれを食すると、彼女の願望が充たされて、1390年ミンイエチョーゾワを生んだ。

*ボンサラインの水についてThat-pon-Abhidhān, p.476, には次のように記されている。

“ပွန်ခရိုင်ရေ = ပွန်ဇလ (ပိဋိ) မေ့ဝံလမြိုင်တို့လှီး ရွှန်း အနီး မြစ်ငါး ခုဆုံရာအရပ်။”

(モールメインのビルー島の近くに位置し、五条の河水が合流している地点) なお荻原氏のマーン・ナンヤーザウインの訳、第7部(1)の註22頁を参照させていただくと次のように述べられている。パーリ語では pañca-jala, モン語では pwan ja lin と呼んでいる。モン族の王はこの水を神聖視し、灌頂式に使用したと。海録島土条の媚麗居は Bilukyun の対音。

ミンガウンが王位に即いてから2年を経た時、アラカン国との間に戦いが起り、そしてまた、ハントワディ国のモン・タライン族とも再び戦争が起った。すでにその時までにはビルマ対モン・タライン族戦は10回を下らないほどまでに続けられている。

シャン族最大の国家シャム王国は1350年に建国されたことは学報20号156頁に述べたが、その版図の中にテナセリム、モールメイン、マルタババン等が含まれていた。テナセリムは1373年に造られ、1380年にウッシンタウン仏塔が建立されたのであるからタイの領土であることは間違いは

ないが、モールメインもタイの領土とされていたが、実際にはタヴォイに至るまでの地域は当時ペグーの支配下にあった。このように当時の境界は全く曖昧で二つの国の領土になっている場合がある。

ところで、ペグー王朝の支配が非常に脆弱であった理由は主として移動するシャン族の行動によるものであろう。ペグー王朝の創始者ワーリールーの後継者の中でその名を挙げなければならない第一の人物はヤーザーダリ（1385—1423）である。ここでヤーザーダリ王が流れをくむ王家の祖であり、また法律文学の上からもかならずワーリールーについて記さなければならないであろう。

ワーリールー (Wārīrū, 1281~1296)

ワーリールーはタトン地区のドンウオンの生れで、村から村へ行商をしながら生計を立てていたモン系シャン族であって、その頃の名をマガドゥ (Magadu) といった。彼は立身出世を夢見て、その実現のためにはあらゆる手段を尽した野心家であったように思われる。そこで先づ、彼はタイ国のソッカテ (Thokkatèmin:、通例スコタイの長と呼ばれている) の元に出入しているうちに象舎の舎人として仕え、長の娘と親しくなり、ビルマの方へ馳け落ちして、二人は結婚した。その時よりスコタイの長を養父として彼は長より援助を得ることになった。

当時、モッタマ (Muttama, (英) Martaban) 地方は独立運動のために混乱に陥っていた。多数のシャン族がジンメその他の隣接州から入り来たって、そこに定着していた。ワーリールーはその機に乗じてそこの支配者になるべく計画をめぐらしていた。折しもモッタマの太守アレインマ (Aleimma) はワーリールーに美貌の妹があることを知り、彼の妻に欲した。そこで野心家のワーリールーは一計を案じた。それは婚礼のため来席するアレインマを暗殺して自分がモッタマの領主になることであり、そしてそれを実行した。それは時代的にはパカン王国が中国軍の来襲のため崩壊寸前にあったが、パカン王国に反旗を翻していたペグーの太守タヤビヤーと手を握りワーリールーは勢力の拡大を計った。互いの信頼のため両者は各々相手の娘と結婚してしばらくの間はうまく行っていた。二人は協力してビルマの諸地方に攻撃をかけ、プロームとタウンゲー以南を占領した。しかし、野心家同志の協力はここまでであった。互いに機会があれば相手を滅ぼそうとして虚々実々の掛け引きをしていたが、タヤビヤーは1287年ワーリールーを暗殺しようとして失敗した。そこで、ワーリールーは身の潔白を信じ、黄金の鉢から聖水を灌いで身を淨めた後、象に跨って、タヤビヤーに決闘を挑み、結局ワーリールーが勝利を収め、タヤビヤーを生け捕りにした。しかし、ワーリールーはある僧侶の仲裁を容れて、それに、近い親せき同志ということもあってタヤビヤーの命を助けた。しかし、再びタヤビヤーはワーリールーを暗殺しようとして、妻つまりワーリールーの娘の密告により捕えられ、終にワーリールーに首を刎ねられたのである。その結果、ワーリールーは下ビルマの王位を独占したが、この王朝は1539年まで続いたが、1298年中国から印綬を受け、それ以後、中国は下ビルマの支配者たちを彼らの任命した太守として認める態度をとった。その都は1369年ペグーに王宮が営まれるまでモッタマ

にあったが、この王朝を総称してペゲー王朝と呼ぶ。ワーリールーは最後にタヤビヤーの子孫たちに殺害された。

ところでワーリールーによって作られた法典について述べなければならない。これより以前 *マヌが書いたものとして伝えられた諸々の法典を1千年の昔デルタ地方ヘインドより移住した者がもってきており、これらの法典はタライン族の寺院に伝持されていたのである。そこでワーリールーはそれらを見つけて僧侶たちに命じ、欽定の法典を編ましめ、それに自分の名に因んで「ワーリールー・ダンマタッ」(Wārīrū *Dhamma-that)と名づけた。この法典はビルマ法律文学の根底をなすものと考えられている。

*マヌ法典及び Dhamma-that については学報17号77頁参照。尚ハーヴィ著「ビルマ史」五十嵐智昭氏訳の87頁〔註〕よりマヌ法典について補足するならば、インドにおいて Dharme (法)に関する文献の総称であって、ダルマーストラ(法経)、狭義のダルマシャーストラ、及びダルマニバンダ(法釈)の三群を包括する。ダルマ・シャーストラの内容は頗る多岐にわたり、日常作法・祭祀・清戒・贖罪に関する規定、家長・波羅門・国王・苦行者・林住者の権利及び義務に関する規則、食物に関する規律、更に宇宙の構成及びその問題について、また輪廻・転生についての論議にまで及ぶものであって、親族法・訴訟法・民法・刑法等謂わゆる「法律」は、国王の義務に関する限りにおいて論ぜられているに過ぎない。数多のダルマシャーストラ中最も重要な地位を占むるものは「マヌの法典」であって、その成立は大叙事詩「マハーバーラタ」のそれと並行して西紀前200—後200年とされている。その内容は、まづこの書の来歴に筆を起し、ダルマの本源、アーリヤ族がその一生を通じて行うべき種々の儀式、ヴェーダの学習、波羅門の四住期に関する規定等、また国王の義務に関する規定があり、民法及び刑法を18の部門に分けて述べ、次いで種姓・贖罪等に関する規定を記し、最後に輪廻及び解脱に関する論述を以て終る。

40 年 戦 役

前号より引続き述べてきたヤーザーダリ王対ミンカウン王戦はモン・タライン族対ビルマ族戦であり、*ハンタワディ国対ビルマ国戦、ペゲーの都对インワの都戦である。この戦いはモン族のヤーザーダリ王が王位に即いた年、即ち、1385年より1423年までの約40年間も戦いが続いたので、この戦役は40年戦役として知られている。それはミンヂーゾワソーゲ王の時代よりその子ミンカウン王の最後まで続けられた。

この戦いの原因は21号、10—11頁に述べた通りであるが、かい摘んで云えば(1)ビルマの北、西、東の各部分の山岳地帯のシャン族が肥沃な土地を求めて移動してきたこと、(2)そして、シャン族もビルマ族もモン族の住む土地の肥沃な地方に目をつけたこと。(3) 1385年にペゲー一帯を支配していたヤーザーダリ王の叔父に当る ミャウンミャの 太守ラウピヤーがヤーザーダリ王とは何事に関しても相いれず、王を廃位せんとして、ビルマ側のミンヂーゾワ王と相計ったこと、等が戦いの原因となった。

*ハンタワディの名は古く仏教伝説にさかのぼり、現在のペゲーの町及びその周辺は、その昔、海の浅瀬の床に過ぎなかった。仏陀はその前世において、海面に現われている一小区劃の砂地の上に黄金色をした二羽の鵞鳥がとまるのをご覧になって、何日かその場所に有名な都が建設されるであろうと预言された。その预言は、その後、タトン国王の二人の息子タマラとウィマラがその聖地にペゲーの都市を建設したことによって実現された。(A Guide to the History of Burma, p.11~12) ハンタワディ (Hanthāwadi) はサンスクリット名で、Hansa =「鵞鳥, a goose (Cog. ド. Gans)」+wadi =「居る, 棲む」を意味し、Hansa,

又は、Hanthā はビルマ語化されて、Hinhā=「かも、wild duck on ruddy Sheldrake」を意味するようになった。そして、ハンタワディのタライン名がペゲー (Pegu) であり、「かも」がペゲーの都を象徴する国鳥と見なされるようになった。

ミンガウン王は1401年より1423年に至るまでの間、ハンタワディ国のヤーザーダリ王を屈服させるために全力をそれに集中した。モン・タライン族は一方においてインワとシャン州との間に不和を引起すことによって、また他方ではアラカンの援助を得て戦争の範囲を拡めようとした。しかし、そのことに対してミンカウン王はどのような策を用いてヤーザーダリ王に対抗したか。ウ・オンマウンの「新ビルマ史」(p. 40—46)の記述よりうかがうことにする。

1403年、*オンバウンの土侯ゾーチャウンポワ (Thogyaung-hpwā:) はビルマ領内のトンドンプーテットの地方を侵略した。ミンガウン王は賢臣ボーヤーザーの言に従って、王族の遠縁に当る娘を土侯に与えて親せき関係を結び、ビルマ——シャン族間に平和を保つべく努力した。

*On : baung=another name for Hsipaw, a northern Shan state (Burmese Glossary by W.S. Cornyn & J. K. Musgrave.)

他国におけると同様に、ビルマにおいても権力を握るためにはその娘や姉妹に美人がいる場合、王や領主に政略的に嫁がせて、うまく取り入ることがあった。そして、このような政略結婚はその後もしばしば行われた。

また、1405年、ニャウンシュエの土侯トーフマインダー (Htaw-hmaing-gyi:) は上述のゾーチャウンポワと同じような関係に入りたい旨を伝えてきたので、ミンガウン王はボーヤーザーの指図通り、ニャウンシュエの土侯にも縁続きの娘と結婚させてビルマ側に引き入れた。

アラカン事件

1404年アラカン国王トラデー (Htaw ragyi:) はパコック地方のヨー、ソー、ラウンシェ等の町々を侵略したので、それに対する報復として、ミンガウン王は若冠13才の彼の息子ミンイエチョーゾワに10ヶ部隊を指揮させ、アラカンに向わせた。アラカン軍はナヌイン山にて彼をむかえ戦ったが、ミンイエチョーゾワはイエミヤッゾワという名の象に乗って、勇敢に戦い、ビルマ軍はアラカン軍を撃破し、続いてラウンシェを占領して、アラカン国王を追って、彼をベンガルへ走らしめた。

この戦いにおいて、ミンイエチョーゾワは若年にして勇名を馳せた。

トラデーの息子ナラメイフラ (Narameit-hla) はモン族の王ヤーザーダリ元へ逃げこんだ。ビルマ軍はアラカン国に達するべくなおも進撃を続け、アラカンの都を占領した。ミンガウン王はそれを聞いて、カレーの領主であったアノーヤター・ミンソー (Anawyahtā Min:saw) にアラカンの都を支配させた。それより一年を経て、ミンガウン王はアノーヤター・ミンソーに王の娘でミンイエチョーゾワの妹に当るシュエピーチャンター (Shwepyī-hkyantha) と結婚させた。

肥沃な三角州地帯を領するモン・タライン族は兵力を養い、ビルマに対し従前より抱いていた恨みを晴らす機会を待っていたが、1404年、ヤーザーダリ王は大軍を引きいて水路より攻め登ってきた。ビルマ軍はこれに対しプロームより河沿いに彼らに対抗したけれどもビルマ軍の一部は

当時アラカンに赴いていたので兵力が弱く、十分に敵の攻撃に耐え得なかったのでタライン軍はサガインまでせまり、戦線は拡大した。その時、有名なサチヨトウミャッ (Sakyothūmyat) というビルマの僧侶がヤーザーダリ王の元に赴き、王に法を説いたので、ヤーザーダリ王はモン族の国へひきあげて行った。

もしこの僧侶が仲裁をしなかったならば、ヤーザーダリ王はそれ以上長く攻撃を続け、従ってより多くの殺生を行ったことであろう。この事件は当時人々に敬まわれていた僧侶が王の粗暴を抑制したことを物語る一例であるが、パガン時代においてもナラパティシートゥ王に対してパンタグー大僧正が練めた場合 (学報17号74頁) も同じような例である。

同じ年の1405年に、ヤーザーダリ王は再度水陸両路より大軍をひきいて攻めてきた。そしてビルマ側のアロエミヨー及び*グートツの町々を侵し占領した。フラインミヨーをも攻撃したが、攻め落せなかったで、プロームの町を包囲した。ミンガウン王はプロームを援けるべく糧食を整え5人の将軍にビルマ軍を指揮させて、プロームの近くより攻撃を始めたが、ビルマ軍は利あらず、ミンガウン王自身が出馬した。プロームに達する前にナウインの地にて迎撃せんとするモン・タライン軍に出遭い、ビルマ軍はよく戦い戦果を収めた。ミンガウン王はプローム一帯をよく固めていたが、その間にモン・タライン軍は上ビルマに向ってビルマ軍の糧食が達しない内に進路を封鎖した。ミンガウン王はビルマ軍の兵士が糧食難に陥るであろうということを知ってヤーザーダリ王の元に休戦の使者を送り、彼の条件を求めた。しかし、ヤーザーダリ王は条件を与えようとしなかった。

*グートツ (Gū-hrwot) は現在ミャン・アウン (Myan-Aung) と呼ばれる所で、その地は18世紀アラウン・パヤーの時代に、彼 (アラウン・パヤー) が敵を「速やかに」(Myan)「征服した」(Aung) ことからかく呼ばれるようになった。(U Ba yin : Min : Gaung-gyi, p. 35)

そこで、ビルマ軍は捕虜にしていたタライン族の大臣タメイン・ゼイビエ (Thamein-zeitbyè) に彼の二人の娘へ手紙を送らせ条件を求めさせた。その大臣の二人の娘はヤーザーダリ王の妃になっていた。二人の娘は自分らの父が生命を乞うていることをヤーザーダリ王に伝え、またタラインの将軍たちにも種々乞うたので、遂にヤーザーダリ王は条件を与えて戦線を去り、都にひきあげた。

タライン族とビルマ族の血族関係

ヤーザーダリ王はビルマ軍の勢力を知り、ビルマ族と血族関係に入ることによって代々彼らが平和を得られるであろうと考えたので、ミンガウン王の妹ミンプラミャッ (Min : hlamyat) と結婚したい旨ミンガウン王に伝えてきた。そして、毎年30頭の象を贈物として献上することを約束した。王は大臣高官たちと相談して、妹ミンプラミャッに“トウパバーデウィ (Thupabhā Devi)”という名を与えて、大臣たちに付添わせ、コーリヤの町の式場にて盛大な結婚式を催し、彼女はヤーザーダリ王の妃となった。

モーニン・タドー (Mō:hnyin:-Thadō:)

ウ・ミンハンの記録では、1406年にミョーフラの太守ウデイン (Udein) にミンガウン王はタウンドゥインの王女シンミミヤツ (Shin Mimyat) と結婚させ、モーニンの町を与えて、*タドーの名によってミンガウン王の指図通りに支配させたのでモーニンの町は豊かに栄え、平和であった。

*タドー (Thadō:) は thatti (=satti)-dhara 「能力、又は、勇気を保持する者」を意味するパーリ語のくずれた型であり、タガウン王朝の流れをくむビルマ族 (学報20号, 164頁) に与えられた称号である。しかしインワ王朝の創始者タドー・ミンビヤーもそうであった如く、彼 (タドー・ミンビヤー) 以後シャン系ビルマ族でタドーの号を名乗る者も多かった。

1406年、ミンイェチョーゾワをパカンの太守 タヤービャーダーの娘 ソーミンフラと結婚させて、王位継承者に任じた。このことを聞いた王の弟であったサガインの領主ティリゼヤトゥル (即ち、シンティダッ) は快よく思わなかった。大臣ミンヤーザーは彼を慰め訓めたけれども、ティリゼヤトゥルは大臣の言葉に耳をかさず、サガインの北方に兵を集めてミンガウン王に対抗した。しかし、ミンガウン王はそれを制した。王は以前より弟が自分のためにしてくれた恩恵を考慮して、彼を処刑せず、監禁したが、彼は逃れて今は親族関係に入っているヤーザーダリ王の元にて身を匿って貰った。しかし、その後、ウ・ミンハンのビルマ史 (p. 191) によれば、彼は兄ミンガウン王にヤーザーダリの内情を知らせた隙で処刑された。弟が処刑されたことを知ったミンガウン王は悲しみの余り、すい眠も十分に取れず、食事も喉に通らなかった。大臣ミンヤーザーが王に法を説いて慰め、始めて王は心を静めることができた、とのことである。

その時以来、ヤーザーダリ王は毎年献上していた30頭の象をバセインの税関に送るのを止めた。ヤーザーダリ王はミンガウン王に献じていた贈物を中止したのみならず、彼の元に逃げこんでいたアラカン国の王子ナラメイフラのためにアラカンの王位を復させるべく軍を送った。モン・タライン軍はアラカンの王位に即いていたビルマ族のアノーヤター・ミンソーを滅ぼし、ミンガウン王の娘シュエピーチャンターをヤーザーダリ王の後宮に入れた。その結果、再度モン—ビルマ関係は悪化して行った。

アラカンに起った事件のためにミンガウン王はジンメの軍と合併してタライン軍を撃つべくジンメに使者を送った。使者はタウングーを経て、ジンメへ向ったが、途中道を間違え、モン・タラインの領土に接した地域に達した時、ヤーザーダリ王の兵士に見つかり、逮捕されてヤーザーダリ王の元へ送られた。

ミンガウン王はその事情を知って大いに立腹し、直ちにタライン国へ軍を進める計画を立てた。ところが、大臣高官たちは、今はまだその時機でないと申し上げたけれども、王はそれを聞かず、1407年カソンの月 (日本の5月頃に当る)、雨の降る中を進軍した。ところが、タライン国に着いた時、ビルマ軍には食糧が十分なかったため引きあげねばならなかった。

ビルマ軍は早速後退することになったが、モン・タライン軍はその機に乗じてはげしく追撃してきたため、ビルマ軍に参加していた二人の王の妃のうち正妃シンミナウはヤーザーダリ王の捕

虜となった。もう一人の南殿の妃シンボメは象の背より落ち、河のほとりにて味方のシンゲ(Hsingè=象頭)に救われて都へ帰って行った。

Hm. yazによれば、ヤーザーダリ王の軍に捕えられたミンガウン王の正妃シンミナウはその後ヤーザーダリ王の妃に挙げられた。一方、インワの都に引きあげてきたミンガウン王は戦いに敗れたことと、正妃を敵に奪われたことのために不愉快でたまらず、ナツ踊りさえ禁じた、と記されている。

ミンガウン王がインワに着いてから、10日程を経て、シンゲとシンボメ妃が都に到着し、王に一部始終を報告すると、妃を救った功績に対してシンゲは王より莫大な褒美を与えられた。しかし、その後、ミンガウン王はシンゲが^{きんま}蒟醬入れを落した時、シンボメ妃が思わず、「おー、シンゲよ」と愛情のこもった言葉を発するのを聞いて、王は二人の間に疑惑を感じ、シンゲを呼んで取り調べた。彼は誠意を尽して、妃を救い連れ戻してきたことを王に話したけれども、王は信用せず、彼を処刑してしまった。その後、他の象使いを呼んで真偽を聞き正したところ、シンゲが王に言った言葉通りであったので、王は誤っていたことを大いに後悔し、シンゲの息子をシンゲの地位につけた。

ここで考えられることは、ビルマ人の性格の欠点の一つは余りにも物事を簡単に判断し、前後を考えず重大な過失を犯し、その後、大いに後悔することであって、今までの例にもよく見うけられるところである。その幾つかの例をあげれば、パガン時代に、詩人であったアナンタトウリヤ大臣を処刑し、また、忠実な馬丁^ノガビを少しの義務の怠慢の隙にて処刑したナラパティシートウ王(学報17号, 71, 72頁)、また、王のために忠勤を励んだ宰相ヤーザーティンジャンをダラに追放した(学報17号84頁)ナラティハパテ王、また、古くはアノーヤター王がシュエピンダーシュエピンゲ兄弟を少しの義務を怠ったために処刑した(学報12号, 109頁)等、その他枚挙にいとまがない。

前回のタライン攻撃は時期も悪く、食糧も十分でなかったため失敗に終わったので、それに鑑みて、こん度は食糧を十分に準備し、ビルマ軍シャン軍の勢力を結集して進軍するように命じ、ミンガウン王は1409年再びタウンゲーを経て進んだ。ターヤーワディに達した時、ポルトガルの兵器をもったヤーザーダリ王の部隊と対抗し、必死になって奮戦したが、勝敗はつかなかった。5ヶ月を経て、雨期が近づいたので、ミンガウン王は軍を整理して都へ引きあげざるを得なかった。

ミンガウン王の度重なるタライン攻撃も成功しなかったもので、いまだ20才にも達しないその子ミンイエーチョーゾワは父王の許しを得て、1410年ターヤーワディを経てハンターワディへ進軍した。ミャウンミャに達し、数度攻撃を敢行したが、成行しなかったもので、バセインへ進み、そこでも又成功しなかったもので、ゲーパウンへ進んで攻撃したが、それでも成功しなかった。

上述の如く、モン・タラインの町々をどうしても攻め落すことができなかったもので、アラカンに攻め入るべく計画を立て、プロームに達した時、水路部隊の兵士を陸路部隊に編成換えをし、アラカンに侵入した。アラカン王ナラメィブラはビルマ軍に抗することができず、インド側に逃

れた。そこで、アラカン国とその山岳地帯の7地区を占領して、インワの都へ引きあげた。ミンガウン王は自分の息子に満足し、彼に賞を賜った。

ビルマ軍がアラカンを占領したことをヤーザーダリ王がきいて、1411年モン・タライン軍の二人の将軍にアラカンへ進軍させた。モン・タライン軍はタンドゥエ（英語名 Sandoway）にて守りを固めたことをミンガウン王は聞いて、ミンイエーチョーゾワに7ヶ部隊を指揮させた。ミンイエーチョーゾワはタンドゥエを3ヶ月間包囲したが、町中に貯えられてあった食糧がほとんど尽きてしまえば、やがてモン王自身が軍を引きいて攻めてくるであろうとミンイエーチョーゾワは考えた。そして、もしモン・タライン軍が出撃してくれば、ヤーザーダリ王の軍との両側から夾撃されることになるであろうと思って、ミンイエーチョーゾワは大臣高官たちと協議した後、ビルマ軍を撤収して都に引きあげた。そこで、モン・タライン軍はアラカンに向い、ビルマの守備隊を襲い、アラカンの都を取り戻して、ナラメィプラをアラカンの王位に即けた。

ティンニー征服

一方、シャン土侯たちはビルマ王の誓いを守り、ビルマを援助したけれどもシャン族のあるものは依然としてビルマ国を侵害していた。1413年ティンニーの土侯が軍を引きいてインワに攻め入るのをミンガウン王は聞いて、ミンイエーチョーゾワを将軍に任じ、7ヶ部隊を以てシャン軍に対抗させた。メーミョーの近く、シンガウンウエウオンの地にて両軍の騎馬隊が出遭い、ティンニーの騎馬隊は潰れた。その後、ミンイエーチョーゾワとティンニーの土侯は象に乗って戦ったところミンイエーチョーゾワが土侯の象の背に跳び乗り、土侯を倒した。ミンイエーチョーゾワはティンニーに達すべく引続き軍を進めた。ティンニー土侯の実子や養子たちは中国軍に援助を求め町を固めたので、5ヶ月間包囲攻撃したけれども町を攻め落すことはできなかった。この時、中国軍がティンニーを援けるべく進んでくるのをミンイエーチョーゾワは知り、中国軍を迎撃したので、中国軍の兵士は多数戦死し、中国軍は潰えた。中国軍を追い払った後、ミンイエーチョーゾワはティンニーを包囲し続けていたが、タライン軍との事件のため父王に呼び戻された。

ミンイエーチョーゾワのタライン攻撃

ミンイエーチョーゾワがティンニーを攻めていたことをヤーザーダリ王は知って、プロームへ軍を進め、町を包囲したが、それを陥し入れることができなかった。1ヶ月を経て、モッタマ地区のイエミョーにタイ国の軍が侵入してきたことを聞いて、息子にプロームを包囲させ、ヤーザーダリ王はモッタマへ軍を進めた。このことを、またミンガウン王が聞いて、ビルマ軍の将軍たちに7ヶ部隊を陸路よりプロームへ進ませ、ミンイエーチョーゾワがティンニーより引きあげてくるのを待った。ミンイエーチョーゾワが帰ってきたので、ミンガウン王は水路より、そしてミンイエーチョーゾワは陸路よりプロームへ向った。

ヤーザーダリ王もプロームに到着した。この戦闘に於て、タライン軍の勇将は多く戦死し、ヤーザーダリ王自身も勢力が衰え、後退し始めたので、ミンイエーチョーゾワは彼を追撃した。ビルマ軍はタンリンを占領した後、西方のバセイン、ミャウンミヤ、ゲパウン等の町々より捕虜をインワの都へ送った。

タライン軍はしばしば士気が衰えたので、1414年、ヤーザーダリ王はビルマ軍と絶えず戦っていた*センウィの土侯にインワの周辺を荒すようにそそのかした。センウィ土侯もタライン軍に使喚されるがままに、インワの周辺を侵したので、ビルマ軍はインワの都へ帰らねばならなかった。

*Hman-nan : Yāzawin, Vol. 2, p. 25 では、「^၄ ငမ္မိ၌ ။」の土侯」となっているが、ウ・オン・マウンの“*Myanmā Yāzawin-thit*” Vol. 2, p. 49 では、「^၄ ငမ္မိ၌ ။」の土侯」となっている。また、荻原先生のマンナン・ヤーザーウイン、第八部(1) 44頁の註235ではテインニーとなっている。

タメインバヤン (Thamein Bhayan :) とガーマニ (Gāmani)

ウ・ボチャーによれば、1414年、モードンモーケを支配していたシャン土侯たちはビルマ側に属するミエドウの町を侵略したのでミンイエーチョーゾワがそれを鎮めたが、彼らシャン土侯たちは中国側へ逃げた。そして、後に残された家族たちはビルマ軍によって捕虜にされた。その時、シャン土侯たちは中国に援けを乞うたので、中国軍はインワに進軍して土侯たちの家族を引渡すようにビルマに要請した。そして、一騎打にてそれを決定することになった。

中国側からはガーマニを、そして、ビルマ側からはタライン族の捕虜*タメイン・バヤンを選んだ。一騎打の結果、ビルマ側のタメインバヤンが勝ち、ミンガウン王は彼を大いに称讃した。

その翌年、ミンイエーチョーゾワはセン・タライン国へ再び攻め入った。ゲパウンの町を落した後、ビルマ軍は食糧に不足してきたので、ミンイエーチョーゾワは一時インワへ帰り、1ヶ月を経て、再びタライン国へ向った。ヤーザーダリ王も繰返す敗北のため彼も衰運に傾いたことを知り、モッタマに難を避けていた時、西側一帯の地方、バセイン、ミャウンミヤの町々もビルマ軍の手に落ちた。ビルマ軍は部隊を分けて大規模に攻撃すべく準備を整えた。

*タメイン・バヤン (Thamein Bhayan :) は「危険なき王」を意味する名前であるが (Porāna Kaṭṭā Abhidhān, p. 370), Thamein はモン名で、「支配者、又は、王」を意味し、大臣や將軍の名に多く冠せられた。

ミンイエーチョーゾワの最後

その後、モン・タライン軍とビルマ軍はペグーの北方パンチョーの地にて戦ったが、ビルマ軍は敗北し、ミンガウン王の王妃、王女たちはヤーザーダリ王に捕われ、彼の妃にさせられた。そこで、ミンイエーチョーゾワは逸る血気を抑えることができず、モン・タライン軍の三拠点を猛攻した。その時、ミンイエーチョーゾワが乗っていた象が疲れ、ビルマの援軍が来ない内にモン軍は30頭の象にて四面より攻撃してきた。ミンイエーチョーゾワの象は百ヶ所の手負いに狂い、彼

は象の背より振り落され、運悪く象に踏まれて戦死した。(ウ・テイン・ウの「ビルマ史」による)。ウ・ミンハンは、この戦闘では、タライン軍にはヤーザーダリ王の引きいる部隊のほかには彼の3人の息子、ビニヤー・ダンマヤーザー、ビニヤー・ヤン、ビニヤー・チャン等の部隊も参加していたが、ミンイエーチョーゾワは僅かな兵を以て大軍に当り、“闘鶏”の如く奮戦した、と述べている。時に*1417年であった。その後、モン・タライン軍は略奪し、ビルマ人の娘たちをさらい、ヤーザーダリ王の元へ送った。デルタ守備のビルマ軍は倉皇としてインワへ引きあげて行った。

*ミンイエーチョーゾワが最後に戦った18回目(ウ・ミンハンでは8回目)の戦闘の地域や年代及びその他の事情が各々のビルマ史家の記述に多少の差異が見出されることを承知願いたい。

ミンイエーチョーゾワの最後について、Hm. Yaz. Vol. II, p. 53によれば、ミンイエーチョーゾワが象の背より落ちた後、傷ついた箇所が大そう痛むので歩くことができず、オッネー樹の下に身を隠していたところをタラインの兵士が見つけて彼を逮捕し、ヤーザーダリ王に差し出した。王は敵である若輩の王子を相手にするのはどうも気が進まない。そこで彼は、ミンイエーチョーゾワに向って、「あなたは(Akō〔兄〕、若い者に対して呼掛ける場合に用いられる)ただ薬をのんで早く直りなさい。そして回復すれば、自由の身になれるように計ってあげよう。自由になって、ここに居なければ、私の娘(王女)を妻に娶り、王位継承者の位をも与えよう。また、インワの都へ帰りたい気持があれば、私は大臣高官たちにあなたをそこへ送らせよう。身体に気をつけて早くよくなるように」と云って、薬を与えた。と記されている。

しかし、ミンイエーチョーゾワはタライン族の王が与える薬を飲もうとせず、「ハントワディを手に入れずして故国へは帰らぬ」と云って、以前からの決心を変えなかった。ヤーザーダリ王はこの王子が生きている限り、モン・タライン国は悩まされるであろうと考えて、その夜のうちにミンイエーチョーゾワを処刑してしまった。

ミンイエーチョーゾワの死について、ビルマ史では(上述の如く)タライン族が彼を殺害したことになっているが、モン史では彼が象によって傷つきその結果、死亡したことになっている、とウ・ボチャーは記している。

1416年ヤーザーダリ王の長子ビニヤー・ダンマヤーザーはタウンゲーを襲ったので、ミンガウン王の息子でプロームの太守であったティハトウはタウンゲーの町に軍を進め、タライン軍を粉碎し、ビルマ軍は象馬及び多くの捕虜を獲得した。ミンガウン王は自分の息子に満足し、ミンイエーチョーゾワの妃ソーミンプラと結婚させ、王位継承者に任じた。

1417年、ミンガウン王の太子ティハトウは水陸両軍を指揮して、ハントワディに軍を進めた。一方、ヤーザーダリ王の息子たちのうちでビニヤー・ダラとビニヤー・チャンがダラの町を固めていたので、攻め落せなかった。そこで、ティハトウはダゴンを攻め、タライン族の王子ビニヤー・セツを捕虜にし、町を占領した。ミンガウン王はビニヤー・セツをよくもてなし、モン・タライン軍とはそれ以上戦う意志のないことを表明した。一方、ビルマ軍がビニヤー・セツを捕虜

にしたことを聞いて、ヤーザーダリ王はダラヘ軍を進めたが、ビルマ軍はそれ以上戦うとはしなかった。

ビルマ王ミンガウンとモン王ヤーザーダリは共に相当の年令に達していたので、それ以上の戦いを望まず、ただ余生を功德を積むことに専念し、智者たちと相談して、専ら国の平和にのみ尽すように心掛けた。ここにおいて、両国の王が戦い合った14年間のモン族対ビルマ族戦役は一応終結を見た。

1421年、賢明な大臣として名声を馳せたボーヤーザがこの世を去り、ミンガウン王も長年の戦いに疲れ、平和に余生を暮すことを欲したが、その同じ年（1422年）にボーヤーザーの後を追ってこの世を去った。

ミンガウン王は功德を積むことに専念し、学者の言に耳を傾け、また、国事にも熱心であった。彼は若い頃より文武に心掛け、人をあなどることを恥じ、恩人には義理が厚く、学ある者、勇気ある者を賞讃した。14才の頃よりビルマ軍の指揮をとって以来、在位20年のうち14年間戦いに参加した。実に、武人精神の横溢した国王であった。

ミンガウン王の死が報ぜられた時、ヤーザーダリ王の妃たちは、「彼の王宮を襲ってその後宮たちを奪っては如何でしょう」と言ったが、ヤーザーダリ王は彼の好敵手を「我が弟よ」（Nga nyi daw）と呼んで、「これからは弓矢をすてて念仏三昧に余生を送ろう」と言って妃たちの言葉を斥けた。さしも剛勇のヤーザーダリ王もそれより一年を経ずして、1423年ペグー山脈の麓にて象狩の最中重傷を負い、それが原因で歿した。

その後、プロームとタウンゲーが独立して国家を成したので、この二国がインワとペグーの緩衝地帯となり、モン対ビルマ戦はしばらく中止の状態に入った。また、インワの王位を継いだシンビュシン・ティハトウ（Hsinbyūhin Thihathū）とヤーザーダリ王の娘シンソーブ（Shinsawbu）が結婚して、ここに戦役は終結した。

ヤーザーダリという名はビルマ語では ဂၢံၤတၢ်တီၤဂၢံၤ < Pāli ဂၢံၤတၢ်တီၤဂၢံၤ

= မင်းထက်မင်း = မင်းတကာတိုက်ထက် သာလွန်သောမင်း ။

〔すべての王より優れた王〕を意味す。（“Pōrāṇakahta Abhidhān” by U Tin Swe, p. 332）

ヤーザーダリ王について、ビルマ人史家のうちには彼がモン・タライン族の王であるためやや偏見を以て彼を記述している感がなきにしもあらず。彼を正當に評価するためにはモン史及び英人史家の記述をも参考にすべきであろう。尚、ヤーザーダリ実録（Yāzadarit Ayē:daw pon）は必読の書である。

ヤーザーダリ大王（1385—1423）について

ヤーザーダリ王はモン族ワーリール王家の中で最も有名な王であり、勇敢で、実力を備え、象・馬術に秀いで、戦略に巧みで、自ら軍の指揮をとった。ビルマの長は常に敢て彼の挑戦に応じて彼と尋常に勝負することを避けたと云われている。ヤーザーダリ王は部下に対して思いやりの

ある親しい感じのする人物であつたらしい。彼は、その昔ペグーにてタライン族の英雄クン・アタがインド教徒の巨人ランバを倒した場所において即位の礼を行い、その場所にヤンアウン・パゴダを建立した。彼は惨たんたる闘争の末ようやくにして王位を勝ち得たのである。国内においては反乱者をよく鎮圧し、また前述のビルマ対モン戦には彼は必らず参加していた。1390年には、彼の勢力はその頂点に達していた。すでに彼はしばしばビルマ軍の来襲を斥け、到る所で反乱を鎮め、また、ミヤウンミヤの太守で、ビルマ軍に協力して、彼を亡きものにせんと計ったラウピャーを撃ち亡ぼした、ことは学報21号、14頁にすでに述べた。しかし、ハーヴィ (p.71) では、彼はラウピャー諸ともミヤウンミヤをも手中に収め、仏恩奉謝のため彼はシュエモード・パゴダに祠堂を建立し、7日間にわたる^{だいき}大会を催して一千人の僧侶を供養し、等身衡量の黄金を喜捨した。また、ラウピャーの一命をゆるし、彼がシュエダゴン・パゴダの一精舎に安住するのを見て自ら満足した、と記されている。

その後のビルマ族との戦いにおいて、彼は究極においてこれを撃退したが、その間ビルマ族のためにその居城たるペグーの町の他はほとんど喪失するという破目にしばしば陥った。そこでヤーザーダリ王はセンウィを唆かしてインワを侵させることによって一時は小康を得たが、しかし彼自身は常にシャン族来襲の恐怖から免れることができなかった。彼が北方から圧迫を蒙る一方、アユティア、カンペンベ及びチエンマイの諸王が南方から侵入することも稀ではなかった。

ヤーザーダリ王は政策的な面でも並々ならぬ手腕を示した。例えば、「モン・タライン族の三国」即ち、ペグー、ミヤウンミヤ、バセインが各々32の「藩」即ち、部落集団に分れるという伝統的区分法も彼がはじめて試みたことである。

ヤーザーダリ王の治世の後、モン族の王のうちにはこれといった王は出現せず、30年の間に王が4代も変った。これも王宮内の鬩清の結果、ヤーザーダリ王の子孫に男子が残らなかったからである。そこでヤーザーダリ王の娘シンソーブ (Shinsawbu) が王位を継いだ。女性が支配者として選ばれたことはビルマにおいては画期的なことと言える。そして、彼女は善政裡のうちに統治を全うした。

対モン族戦の結果

約40年間続いたこのビルマ族対モン族戦は両民族にとって全く無益な戦いであつた。精魂を尽して戦ったこの戦役の結果、ビルマ族にとってはバガン時代に始められた仏教文学や詩作の発達も阻害され、政治・経済・文化等の上に何の利益ももたらされなかった。また、ミンイエーチョーゾワをはじめ幾多の勇将兵士が生命を絶ち、ただ死と破壊のみが余りにも多かった。インワに対して、タライン側は彼らの地域の近くで戦ったので、ビルマ側ほどにはみちめな損害を蒙らなかった。その上、インワの支配者たちは属国との交渉に余り深く巻込まれたために、彼らは手に負えなくなり、遂にはオンバウン、ヤンホエ、モーニン等の山岳地帯のシャン諸州は地方のビルマ族の領主たちと提携したので、インワを都とするビルマ国は長期にわたって不安の状態に陥入

って行った。そして、16世紀の前半にはシャン土侯たちの関渉はその頂点に達し、折しも米倉地帯であるチャウセ地域がタウンゲーに割譲されたことによって致命的な経済的打撃を受けた。ハーヴィも言っている如く、北部ビルマは“ど鳴りつけるシャン州の混乱せる精神病院”となった。団結心の欠如を暴露し、文化的な進歩発達の皆無と戦罰によってビルマ国は時代の進展に遅れて行った。

対モン・タライン戦再開

インワにおいては1422年ミンガウン王の息子シンビューシン・ティハトウ (Hsinbyūshin Thihathū) が即位し、一方ハントワディではヤーザーダリ王の後を長子ビニャー・ダンマヤーザー (Binyā:dhammayāzā) が継いで王位に即いた。しかし、彼の2人の弟ビニャー・ヤン (Binyā:yan) とビニャー・チャン (Binyā:kyan) は王位に即いた兄と仲が悪くことごとく反抗の態度を示し、ハントワディ国は分裂せんとする状態にあった。

ビニャー・ヤンはダゴン、また、ビニャー・チャンはタンリンの太守となった。ところがビニャー・ヤンはその後、兄と仲直りをして、王位継承者に任じられたが、末弟のビニャー・チャンはなおも兄たちに反抗し続け、インワの王に援けを求めた。ビルマ王ティハトウはビニャー・チャンの求めに応じて二人の將軍に一万の兵をあたえてダゴンに向かわしめた。ビニャー・チャンはビルマ軍と合同してダラを攻め落した。しかし、またビルマ軍の將軍とビニャー・チャンは不仲になり、今度は兄であるハントワディ国王に援軍を頼み、ビルマ軍をしりぞけた。その後、ビニャー・チャンはモッタマに移り、また王位継承者ビニャー・ヤンはダゴンに赴き、再び兄であるダンマヤーザー王に反抗を示した。

上述の如く、モンタライン国では紛争が続いていることを知ったインワの王ティハトウは陸路部隊7ヶ部隊と水路部隊5ヶ部隊を進ませ、ゲバウン、バセイン、ダラ等を占領させた後、ダゴンの都を水陸両路より囲んで攻めた。1ヶ月を経た頃、ダゴンの支配者ビニャー・ヤン事件解決の手段として彼の従姉妹に当たるシンソーブをインワの王に献上する旨ティハトウ王に伝えてきた。そこで王は水路によってタライン国へ下り、フラインの町に達した時、ビニャー・ヤンはシンソーブを美しく飾らせて大臣高官たちを付き添わせ、インワの王を迎えた。ティハトウ王も彼女を送りに来てくれたモン族の高官たちを7日間厚くもてなして、インワの都へ彼女を連れて帰って行った。

シンビューシン・ティハトウ王の最後

シンソーブがインワに来る以前、ティハトウ王にはソーミンブラ (Sawmin:hla) とシンボメ (Shinbome) という王妃がいて、王は美人のシンボメの方を一そう愛していたので、第一王妃であるソーミンブラは不愉快でたまらず、宮廷の外に家敷を建て、召使いと共にそこに住んだ。ところが今度モン族の王女シンソーブが王妃になってからはシンボメのことは忘れ、シンソーブ

のみを王は愛した。シンボメは悲しみと嫉妬のあまり、オンバウンの土侯と通じ、王を殺害しようとして計画した。1426年ティハトウ王はアウンピンレーの地に田畑を作り、側室たちと楽しく過ごしていたが、ある日、オンバウン土侯の軍に襲われて果てた。しかしビルマの高官や兵士たちはシャン族の支配を好まなかったので団結して反撃し、オンバウン土侯のシャン軍を撃退した。

シンボメ (Shinbome)

ビルマ史において*有名な王妃シンボメはピンヤ王家の タズィーシン・ティハトウの孫ティンカトゥンゲ (Theinhkathunge) とミンダーゾワソーケの娘ソーザラーカデウィ (Sawzalākadewī) との間に生れた娘であった。彼女は美貌が優れ、8才の頃よりインワのミンガウン王に引きとられ、その後、シンビューシン・ティハトウ、ミンプランゲ、カレーチェータウンニヨー、及びモーニン・ミンタヤーの5代の王の妃となった。

シンボメは策略に富んでいた。ティハトウの時代にティハトウを嫌って、オンバウン土侯に彼を襲わせ、その後、ミンプランゲを毒殺した。また、モーニン王が彼女を迎えにきた時、彼に「奴隸の臭いがする」と云ったのは当時モーニン王が未だモーニンの太守に過ぎなかつたので“Kywun” (奴隸) という言葉を使ったことは彼女が如何に誇りの高い女性であったかを示している。

*有名な王妃シンボメ。彼女について、Kawilekkhanā-that-pon の中に、また、Sale U Pon-nya や Hsayā Hpeなどが詩の中で彼女のことを「一生涯のうちで5代の王の妃となったシンボメ」として歌っている。

シンソーブ (Shinsawbu, 1453—1472)

シンソーブはハントワディ国王ヤーザーダリの娘として生まれ、20才の時ヤーザーダリ王の甥に当るタメイン・シートウ (Thamein-sīthū) と結婚して*男子二人と娘一人を生んだ。

*ウ・ボヂャでは男子一人、娘二人と記されている (p.147)

その後、タメイン・シートウが亡くなって、彼女が29才の時に、前述の理由によって、従兄弟であるビニャー・ヤンは彼女をインワのシンビューシン・ティハトウの元へ送り、彼女は1422年にインワにて王妃となった。彼女は容貌特に優れ、政略結婚の犠牲になったのであるが、大いにティハトウ王の気に入る、シンボメ以上に愛された。

彼女はインワにてティハトウの王妃として3年、ミンプランゲと3ヶ月、カレーチェータウンニヨーと7ヶ月、パカン・タヤービヤーともしばらく、モーニン・ミンタヤーと3年、5人の王の妃として7年をインワにて過ごした時、1429年、即ち、モーニン王 (Mō:hnyin:min:) の時、彼女はインワの宮廷生活に嫌気を感じ、当時インワへ学問の修業に来ていたダンマダラ (Dhammadhara) とダンマニャーナ (Dhammanyāṇa) という二人のモン族の僧侶と共に秘かに相談し、ハントワディ国へ逃げ帰った。時に彼女は36才であった。その後、1453年彼女が59才の時タイン国にて女王として統治した。

父王ヤーザーダリが亡くなってから彼女の統治期間中、国は平穏であった。老年に近づくに及

んで彼女の世継ぎとしてダンマダラを選ぶことにし、*5種の宝器を準備して、彼を還俗せしめ彼女の娘と結婚させて、ダンマゼディの名によって王位継承者に任じた。

5種の宝器 (Min : -myauk-tan-hsā-ngā : -bā :) は、Judson の辞書 (p.739) によれば、“hti : hpyū (白傘), makai' (王冠), thanlyet (剣), hkye nin : (サンダル), thā : myi : yap (ヤックの尻尾で作られたはえたたき)”*であって、王標として必ず備えていなければならなかった。

1459年、養子に王位をゆづり、彼女の余生をダゴンの町に過ごした。シュエダゴン・パゴダを修復し、戦争の捕虜 500 人を*パゴダ奴隷として寄進した。1472年 (ウ・ボヂャでは1469年) 78才の時、燦爛たる塔の九輪を眺め得る位置に彼女の寝台を据えしめ、彼女はそこで最後の息を引きとった。

*パゴダ奴隷については学報12号、110頁参照。

ダンマゼーディ王 (Dhamma Zedi Min :) (1472—1492)

シンソーブはその後継者として、僧侶出身で学問に秀いでたダンマゼディを養子婿として彼女の娘と結婚させた。そして彼女自身は退位後、余生をシュエダゴン・パゴダで送った。シュエダゴン・パゴダは歴代の王によって修復されたが、彼女もパゴダの周囲に高さ50フィート、幅900フィートの台を築き、今日の遺跡のもとを造り、そこで息をひきとった。

ダンマゼディ王はペグーにシュエグーデー (Shwegūgyi :) とチャイポン (Kyaikpon) の両パゴダを建立した。しかもダンマゼディの時代の石造建築はすべて優秀なもので、更に仏教復興の気運に乗り、人々は競って喜捨したので、平原には大小のパゴダが林立して仏教の最盛期を思わせた。また、彼は1475年に22名の僧を仏教の発祥地セイロン島に派遣した。彼ら一行の目的はセイロン島第一の僧院であるマハーヴィハーラ (B. C. 251年創立) の僧侶から如法の受戒を授かることにあった。そして、ビルマに帰った後、彼らは下ビルマの僧侶に受戒を授けるのであるが、ビルマ国内はもちろん、タイ国からきた僧までも受戒した。セイロンの戒法の権威は相当なものであったと思われる。パガン時代にもナラパティシートウ王の頃、チャパタを含む5人の僧侶がセイロンにて受戒し、帰国後ビルマの仏教界に新風をもたらしたことがあった。(学報17号75—76頁)

ここでビルマ仏教は300年間の諸派対立から一転して、ここに統一の基準として*カルヤーニーの流れを汲むこととなった。そこで、ダンマゼディ王はそれを記念してペグーの町に近い戒壇 (Kalyāṇi Thein) に10基の石碑を建立し、前述の出来事を刻んだが、これを世に「カルヤーニー碑文」と呼び、仏教史上非常に重要な碑文である。

“カルヤーニー”の名はマハーヴィハーラ (僧院) がその岸边に立っているカルヤーニー河から由来している。ウ・ティンウの「ビルマ史」111頁に、“မလ္လာတီ ချောင်း မနား ရှိမတဝိတဝရကျောင်း
၈၀၅၆: ကိသိပ္ပာနသမ္ဘဝဓါ။”* と記されている。

王は裁判が上手なことで有名であり、彼の裁判記録はダンマゼディ・ピヤットン (Dhamma-zedi-hpyat-hton :) として保存されている。ピヤットンとは (大野徹氏「ビルマ語文献解題」, 29

頁に述べられている通り) 法典, 又は, 慣習法に基いて定められた社会的規範例集の事で, 内容的には, (1) 告訴された事件を中心に王もしくは判事が下した判決を集録したものと, (2) 説話物語等に範をとり, 法的規範というよりは, むしろ倫理道德的教訓をまとめたものとの二種類に分かれる。もちろん, この王のピャットンは (1) に属するものである。

アラカンとインドとの関係

Hall の記するところによれば (p. 31~32), ビルマ軍によって追放されていたアラカン国王ナラメイフラ (Narameikhla) は 1430 年ベンガルの援助を得て帰国し, Gaur の回教王の属国として復歸した。彼は首都として*ミョーハウン (Myō-haung) の町を建設し, そこに回教の信奉者たちのために回教寺院を建立した。この時より, アラカン国歴代の王は仏教徒ではあるが, 彼ら自身の名に回教徒の称号をつけ加えた。例えば, ナラヌー王 (Naranū min:) には Alikhan, バソーピュー王 (Bhasawhpyū min:) には Kalimāshā 等の称号にて呼んだ。彼らは回教徒の信仰告白であるという Kalima を描いたメダルを発行した。アラカン国とインドとの関係は 1459 年にアラカン国王がチタゴンを占領した時一そう明白となった。

*Myō-haung は「古都」を意味し, 現在のアキヤブ (英語名) に当る。また, しばしば行われた戦いのためその町が兵力の集結場所になっていたために Sit-twe-myo 「兵士たちの都」とも呼ばれ, アラカン国の首都であった。

ミンフランゲ (Min:hla nge) (1426)

シンビューシン・テイハトウ王がシャン族の手にかかって果てた後, 第一王妃ソーミンブラの子ミンフランゲが未だ 9 才にて王位に即いた。そして, 当時の慣習としてシンボメが彼の第一王妃となった。何という数奇な宿命であろう。

それから 3 ケ月を経た時, シンボメは以前より親密な間柄にあったカレーチェータウンニョー (Kalē:kyē:taung nyo) の元へミンフランゲを秘かに呼び寄せて彼を毒殺し, カレーチェータウンニョーを王位に即けた。

カレーチェータウンニョー (Kalē:kyē:taung nyo, 1426—1427)

カレーチェータウンニョーはシンビューシン・タヤービャー (学報21号17頁) の子であって, 彼がインワにて即位したことを聞き, モーニン・タドーの軍は水陸両路よりインワに侵入して来た。カレーチェータウンニョーはパカン・タヤービャーに美女シンソープをゆづり, タウンゲーの太守ソールー・ティンカヤー, タウンドウインの太守ティハパテ, 及びオンバウンの土侯等にも贈物をあたえて援助を要請し, モーニン・タドーに反撃しようとした。しかし, 交戦の結果はシャン軍の方が優勢であった。インワの王を援けに来た オンバウンの土侯にもインワよりもモーニンの方がより多くの贈物を与えたのでビルマ側を援けずに引上げて行った。タウンゲーの太守ソールー・ティンカヤー (Sawlū:-thin hkayā), タウンドウインの太守ティハパテ

(Thihapathe), パカンの太守タヤービヤー (Tayābyā:) 等もインワに勢力なく、戦いに不利な状態にあることを知って、それぞれの国へ引きあげ、インワに対し反抗の態度を取った。

カレーチェータウンニヨーも反撃に出ることができず、アラカンへ軍を進め。アラカンの王を捕え、アラカンの勢力を借りて敵を撃つべきであるという大臣たちの言葉に従って、王はシンボメ妃を連れて、夜のうちに秘かに出発した。サリンよりアラカンに渡ろうとしてペロントウンに達した時、突然病いに襲われ、カレーチェータウンニヨーは1427年病死した。王位にあること僅か7ヶ月であった。シンボメ妃はシュエセドーにて軍を立て直し、そこに陣取った。

ミンダーヅワソーケ王よりカレーチェータウンニヨーまで6代、初代タドー・ミンビヤーを含めてインワ王朝第一期は7代の王を数える。このインワ第一期時代には、その領土は北はモーニン、バモー、東はシャン山脈、南はプローム、タウングー、西はアラカン山脈の麓のそれぞれの地域を含んでいた。そしてジンメはインワに朝貢を献上していた。

参 考 文 献

- U Hpō : Kyā : : Myanmar Yāzawin Akyin : (1937)
U On Maung : Myanmar Yāzawin Thit (1653)
U Tin U : Myanmar Naingngandaw Thamaing San pya (1957)
U Min Han : Myanmar Naingngandaw Hket-laik Yāzawin (1937)
Maung Thaw : Aindiya-Myanmar Hset-hsan-yē : Hmat-tan : (1966)
 : Hman-nan : mahā Yāzawin, Vol. 1
U Ba Yin : Min : Gaung-gyi : (1948)
G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)
D. G. E. Hall : Burma (1950)
ハーヴィ著 五十嵐智昭訳 : ビルマ史 (1943)
アーサーフェアー著 岡村武雄訳 : ビルマ史 (昭18)
萩原弘明著 : フマンナン・ヤーザウイン邦訳, 第7部
著者不明 : A Guide to the History of Burma
Judson : Bur-Eng Dict. (1953)
U On : Shwe : That-pon Abhidhān (1956)
U Tin Swe : Porāna Kahtā Abhidhān (1954)
U Maung Gyi : : Pāli Abhidhān-bkyut
水野弘元著 : パーリ語辞典
M. O'C. Walsche : A Concise German Etymological Dictionary (1952)